

〈第 369 回〉研究例会報告

日 時：2021 年 7 月 24 日（土）14：30～16：00

会 場：オンライン（Zoom）

テーマ：デジタルレファレンスによる個別学修支援

発表者：小松泰信（大阪女学院大学）

参加者：25 名

1. はじめに

2020 年度の春学期、ほぼすべての大学でオンラインやオンデマンドによる授業が行われ、学生たちは大学に行くことができなかった。Zoom 等のビデオ会議を利用した講義やディスカッションと LMS(Learning Management System)を利用した Web テストや課題提出が一举に広まるきっかけとなった。この発表は担当の初年次情報リテラシー教育において、図書館との協働で個別学生の小論文作成過程に寄り添うデジタル・レファレンスを実施された報告であった。大阪女学院大学における初年次情報リテラシー教育の概要と ICT 環境、「デジタル・レファレンス・オンライン」サービスの実施概要、そして LMS を教員と司書が共有することで、学修文脈に埋め込まれた「エンベディッドライブラリアン」としての高等教育図書館員の役割についても考察された。

2. 大阪女学院大学における初年次情報リテラシー教育の概要

大阪女学院大学における初年次情報リテラシー教育は、大学・短大の初年次での必修科目である。この科目は学生が自由なテーマで、決められたスタ

イル（APA スタイル）で小論文を提出するというもので、特に文献等の収集に図書館を積極的に活用することが求められる。15 コマの授業のうち 2 週目、3 週目は図書館での演習を含み、4 週目の OPAC 検索には図書館員が授業に参画している。40 年以上続く科目であり図書館と教員の協働が長年蓄積されてきたことから、資料の貸出に留まらず小論文作成過程の様々な段階で、図書館員に相談することも推奨されている（図 1 参照）。

しかし、2020 年度の春学期は全科目がオンラインとなり、図書館利用も制限された。図書館では 5 月から非来館型サービスとして郵送貸出や学外からのデータベース利用等を開始し、6 月からは人数制限をしながら一部貸出のための来館を可能とした。ただ滞在時間も 1 時間と制限があり、小論文や課題、資料について相談することができない、資料を借りられない、といった状況が続いた。そこで 7 月 13 日～8 月 6 日の期間（最終アウトライン～小論文提出直前まで）に、Zoom および Google Meet による「デジタルレファレンス・オンライン」サービスが開始された。

図 1 大阪女学院 初年次情報リテラシー教育における論部作成のステップ



3. 「デジタルレファレンス・オンライン」の概要

サービス期間は、各学生が小論文の最終アウトラインを作成する段階であり、進捗が遅れている学生の不安は増大する。「デジタルレファレンス・オンライン」は一人30分以内で申込制とし、図書館員の業務時間やローテーションから対応可能な日時(全19回)が設定された。Moodle コース上に希望日時のWeb登録用の窓口を設定し、申込を行うようにした。学生は事前に Google ドライブで小論文作成過程に関わる課題ファイルを教員と図書館員にも共有し、個別に進捗状況が把握できるようにした。特に授業10週目の課題で作成する最終アウトラインや作成中の情報カード(論文に引用する予定の情報と用いている文献及び引用箇所を記録したもの)が、この段階では重要な課題であるが、それ以前の課題ができない状態で止まっている学生も存在する。また順当に進んでいるように見える学生でも、アウトラインへの不安や情報が十分集まらずに苦慮している場合もある。課題ファイルを事前に共有しておくことで、図書館員は事前に個々の学修進捗状況やテーマを知ることができ、情報提供に必要な準備を行うことができた。

4. 「デジタルレファレンス・オンライン」の実施と評価

7月13日～8月6日の期間にオンラインレファレンスを利用した学生は、36人で述べ相談件数は53件であった。オンラインレファレンスを利用したことをきっかけに、来館してサービスを受ける学生などリピーターもいた。担当した職員(専任3名、嘱託2名)が2人一組で相談に応じ、質問内容や参考資料を含む回答プロセス等のレファレンス記録を Google ドライブ上で教員とも共有した。サービス開始の初期は課題も提出し、順調に進んでいる学生が「これでいいのか?」「自分が一番遅れているのではないか」など、友人と相談したりすることができない環境での不安を抱えている学生が中心であった。サービス期間の後半になると、締切が迫る中最終ア

ウトラインが完成せず、「書きたいことがわからない」「何をすればいいのかわからない」といった層が中心となった。各段階で図書館員は不安な学生を励まし、論文を書きあげるまでのイメージ付けを行えるよう助言を行った。教員が示した課題へのコメントを参考にイメージを整理することで、アウトラインの完成につながっていった。個々の状況に応じて、図書館員が相談に応じることでモチベーションを高めることができたと思われた。

レファレンスを受けた学生のアンケートでも満足度は5段階評価で平均4.8点と高く、自由コメントでは Google ドライブでの学習成果物の事前共有により相談がスムーズに行えたことや、「自分では気づかなかった検索キーワードを知れた」、「とても気さくで話しやすかった」、「一緒に親身になって考えてくれるのでとても心強く、頑張ることができた」など、図書館員のアドバイス内容や接遇に対する評価も見られたことが報告された。

5. まとめ

大阪女学院の初年次情報リテラシー科目は必須科目であり、全学生が履修する。この科目では自ら選んだテーマで小論文を執筆することになっており、そのことが個々人の主体的な学びの展開につながると考えられている。逆に多人数に対して、個別化した学びの支援が必要となる。集合授業ができない状況では、従来から行っていたLMSによる学修管理やCloudによる情報共有などが、より実質化し、個別化に対応するものとなったといえる。

(文責: 川崎 千加 大阪女学院大学・大阪女学院短期大学)

参考: 小松泰信ほか.(2021, 4. 7). 「情報リテラシー教育におけるエンベディッド・ライブラリアン: 「デジタルレファレンスオンライン」による学修支援の試み. 『大阪女学院大学紀要』, (17), 55-72. <http://ir-lib.wilmina.ac.jp/dspace/handle/10775/3715>